

安足地域麦類技術情報 No. 1

令和5(2023)年10月19日
安足農業振興事務所

適期内に播種できるよう計画的に作業を進めましょう

1 今後の気象

気象庁の3か月予報(9月20日発表)によると、播種後(12月～2月)の平均気温は「高い」確率が60%、降水量は「平年並」又は「多い」確率ともに40%という予報が出されています。

高品質麦の安定生産を図るため、適期内に播種できるよう計画的に作業を進めましょう。

表1 関東甲信地方 寒候期予報(12月～2月)

関東甲信地方 寒候期予報(12月～02月)			
2023年09月19日14時00分 気象庁発表			
冬 12月～02月	天候	平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。	
	気温	平均気温は、高い確率60%です。	
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。	

気温、降水量の各階級の確率(%)									
気温	関東甲信地方	冬 12月～02月	<table border="1"><tr><td>低い(少ない)</td><td>10</td><td>平年並</td><td>30</td><td>高い(多い)</td><td>60</td></tr></table>	低い(少ない)	10	平年並	30	高い(多い)	60
低い(少ない)	10	平年並	30	高い(多い)	60				
降水量	関東甲信地方	冬 12月～02月	<table border="1"><tr><td>低い(少ない)</td><td>20</td><td>平年並</td><td>40</td><td>高い(多い)</td><td>40</td></tr></table>	低い(少ない)	20	平年並	40	高い(多い)	40
低い(少ない)	20	平年並	40	高い(多い)	40				

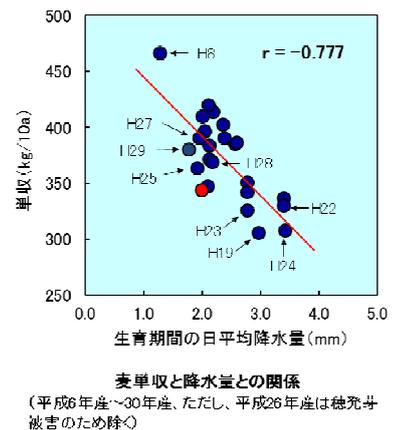
■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

2 今後の作業について

(1) 排水対策

近年、短期間にまとまった雨が降ることが増えたため、麦類の収量に悪影響が出ています。(右図参照)

安定した収量を確保するため、排水対策を徹底しましょう。排水対策は、①額縁明きよの設置(地表水の早期排水)、②スタブルカルチなどによる心土破碎(浸透排水性の改善)を組み合わせると効果的です。



(2) 土づくり

収量と品質を向上させるためには、深耕や有機物の投入、土壌改良資材の施用が重要です。

1) 深耕

作土の深さは20cm以上になるよう耕うんし、作土深を確保しましょう。

2) 有機物の施用

堆肥や稲わらなどの有機物を施用しましょう。特に、良質な堆肥を施用することで、土壌の地力向上や通気性・保水性の改善、また地温上昇等の効果が期待できます。

有機物の種類	施用量 (kg/10a)
牛ふん堆肥	1,000

※稲わらを鍬込みした場合は石灰窒素 10～20kg/10a を施用しましょう。

3) 土壌改良資材の施用

麦類は一般的に酸性に弱いため、土壌が酸性化すると生育が極端に悪くなります。播種前に苦土炭カルなどのアルカリ資材を使用し、pH6.5 を目標に矯正を行いましょう。特に水稻作付け後の土壌は pH5.0～5.5 になっている場合があるため、必ず施用するようにしましょう。

リン酸は根の発達や分けつの発生を促進します。土壌分析を行い、不足している場合は土壌改良資材で補完しましょう。

土壌改良資材名	施用量(kg/10a)
苦土炭カル	60～100
OM-37	80～100

(3) 肥培管理

基肥窒素施肥量の目安を基準として、令和5年産のタンパク質含有率や生育状況、土性に応じて施肥量を加減しましょう。

表2 水稻後に作付けする場合の基肥窒素施肥量の目安(kg/10a)

品種名	ニューサチホ ゴールドデン	もち絹香	さとのそら
基肥窒素施肥量	6.5～8.0	10.0以上	10～11

○タンパク質含有率が低い場合（ビール大麦ではオレンジカード、小麦ではタンパク質含有率9.7%以下）

⇒ 被覆窒素肥料を含む肥料を使用しましょう。被覆窒素肥料を含む肥料を使用している場合は、基肥窒素施肥量を1～2kg/10a増やしましょう。

○タンパク質含有率が高い場合(レッドカード)や倒伏の発生が見られた場合
⇒ 基肥窒素施肥量を1～2kg/10a減らしましょう。

○砂質のほ場や大豆作付け後のほ場で、麦類を作付けする場合

⇒ 砂質のほ場では基肥窒素施肥量を1～2割増やしましょう。

大豆作付け後のほ場では3～5割程度減らしましょう。

(4) 播種準備

1) 播種時期

麦類の栽培においては、播種時期が生育に大きな影響を与えるため、適期内に播種することが重要です。適期よりも播種が遅くなると、タンパク質含有率の増加や収穫期の遅れによる品質低下などにつながります。

また、極端に播種が早すぎても、整粒歩合の低下や被害粒の増加などにつながります。気象庁の長期予報などを確認して播種時期を調整しましょう。

播種時期が生育に及ぼす影響

適期より遅れた場合の影響	適期より早い場合の影響
凍上害が発生しやすい 分けつ数が少なく、穂数が少なくなる 蛋白質含有率が高くなる 硝子粒率が増加する 赤かび病が発生しやすい 収穫時に雨に遭遇し、穂発芽の発生や品質低下を招く	縞萎縮病に感染しやすい 春先に凍霜害を受けやすい 側面裂皮粒等の被害粒が発生しやすい 過繁茂で茎数が多くなるが、無効分けつが多くなる 1穂粒数が少なくなる 整粒歩合が低く、容積重が軽くなる

【麦類の播種適期】

11月10日～11月25日

2) 播種量

耐倒伏性を高め、粒の充実を良くするためには、標準量で播種することが重要です。過剰な播種量は、経費の無駄になるだけでなく、過繁茂や軟弱徒長の原因になり、倒伏の危険が増して減収や品質低下に繋がります。

表3 品種ごとの標準播種量(kg/10a)

品種名	ニューサチホゴールド	もち絹香	さとのそら
播種量	8.5	8.5	7～8

※播種が適期より5日遅れるごとに播種量を10%程度増やしましょう。

問い合わせ先

安足農業振興事務所 経営普及部 農畜産課

TEL: 0283-23-1431

URL: <https://www.pref.tochigi.lg.jp/g58>

